

今年でなんと300年。

「組踊」をどう存知ですか？



荒れ狂う鬼女と僧たちとの攻防が見せ場の一つ「執心鐘入」

「組踊」とは...

「組踊」は「くみおどり」と読みます。「踊」の字が入っているので、舞踊やダンスを思い浮かべがちですが、組踊は「お芝居」の一種です。ですので、舞台という仕切られた空間に、登場人物が出てきてセリフを喋り、楽器や歌による演奏を交えながら、喜びや悲しみ、時には笑いも含んだドラマを演じ、ひとつの物語を紡いでいきます。

「組踊」は、シエークスピアや歌舞伎ほどではありませんが、それでも300年の歴史がある「お芝居」です。カメラも飛行機もない時代、玉城朝薫(たまぐさむねひら)という王府の役人が、大陸や本土の芸能から色々学び、当時の沖縄が持っていた「わざ」をかき集め、知恵を絞り、工夫を凝らして、「一生懸命つくり出したのが「組踊」です。

「組踊」はまた、「沖縄の伝統芸能」が凝縮されているとも言われます。組踊のストーリーは、沖縄の古い言い伝えをもとにし、セリフは沖縄の言葉により、沖縄独特のリズムによって話されます。音楽もその一つ。二線をはじめとする楽器により演奏

されるのは、沖縄の歌と曲です。そして演じた手たちは、紅型をはじめとする衣裳をまとい、琉球舞踊をもとにした優雅な身のこなしにより、登場人物の動きを表現します。

沖縄の人々は、この組踊に長年親しんできました。もともと琉球王国の役人たちが、中国からの大切なお客をもてなすためにつくられた組踊は、やがて首里城を飛び出し、離島を含む県内各地に広がりをみせ、地域の「お芝居」としても定着しました。また、比較的あたらしい時代につくられた沖縄芝居や雑踊も、組踊をヒントにしたといわれています。

このように、沖縄の先人たちの英知の結晶であり、ぎゅっと沖縄らしさが詰まっています。そして沖縄の人々に長く親しまれてきた「組踊」を、もしあなたがまだ知らない、あるいは何となく敬遠してしまっているのなら、とても惜しいことをしていると思いませんか。少し、組踊に触れてみようかなという気持ちになっただけでしよつか。次は、組踊を楽しむコツをお伝えします。

演300年記念イベントが「観覧できるホームページ」を準備しています。ぜひ「組踊300年」のキーワードで検索し、アクセスしてください。*組踊を大切にすることは、沖縄の文化を大切にすることに繋がります。この機会にぜひ組踊に接してはいかがでしょう。

*実行委員会 HP : <https://kumiodori300.okinawa/>

「組踊」を楽しむために

「組踊」を楽しむには、少しだけコツがいろいろあります。逆に言うと、いくつかのポイントを押さえれば、ほとんどの組踊が身近になり、舞台を満喫することができそうです。ここでは、3つのコツをお伝えしたいと思います。

1つ目は「あらすじを知る」です。国立劇場おきなわなど、字幕が表示される劇場もありますが、そうした設備のない舞台も少なくありません。あらすじを事前に頭に入れておくことで、物語の展開を追いやすくなります。あらすじは、その演目のチラシに書かれていることもありますし、また、インターネットで調べるのもいい方法です。



沖縄伝統芸能の殿堂「国立劇場おきなわ」大劇場

「コツ」の2つ目として、これも事前に知っておいた方がいいことです。組踊の「約束事」があります。この約束事により、観る人の想像力を活用することができ、舞台セット以上の豊かな場面を描きだすことができます。例えば組踊では、舞台の上を半周、または一周することで「長い距離を移動した」ことを表現します。また、再会の

喜びを大げさに抱き合ったりするのはなく、こも控えめな方法で表現したりします。組踊にはこうした約束事がいくつもあります。日本芸術文化振興会が作成した「文化デジタルライブラリー」というホームページがあり、組踊の約束事を詳しく解説しています。動画もありとてもわかりやすいので、ぜひご覧ください。

2019年は組踊の一年！

2019年は、「組踊」が首里城で初めて上演されてから300年目を迎えます。これを記念し、組踊の持つ魅力や意味を捉え直し、先人の功績をたたえ、次の世代についでいくために、多くのイベント、事業が企画されており、普段の年より多くの組踊が上演され、皆さまの目に触れることになるでしょう。組踊上



火を吹く大蛇が登場する「孝行之巻」(写真3枚は全て国立劇場おきなわ 提供)

問い合わせ 文化振興課 電話：098-866-2768 FAX：098-866-2122